

# ロータリーの基本

## ～研修の手引き～

\*この手引きには、ロータリーのことをより深く理解するための基本的な情報が記述されています。

クラブ研修リーダーが、新会員や現会員に対する「ロータリー研修」のテキストとして活用していただければ幸いです。

この手引きをスライド（パワーポイント）にした資料もありますので、地区研修委員会までお問い合わせください。

国際ロータリー第 2840 地区

2009－10 年度

地区研修委員会

2009. 9. 6

# 目次

<b>I. ロータリーの定義</b>	<b>2</b>
<b>II. 奉仕と親睦 <i>Service and Fellowship</i></b>	<b>2</b>
<b>III. ロータリーの歴史</b>	<b>2</b>
ロータリーの創立 シカゴ RC (1905 年) / シカゴ RC の最初の綱領 / 親睦か 奉仕か / 全米ロータリー・クラブ連合会 (1910 年) / 道徳律 (職業倫理訓) の策定 / アーチ・クラフ 基金創立 / 理念提唱か 奉仕の実践か / 決議 23-34 (1923 年) / 四大奉仕部門の 採用 (1927 年) / 日本のロータリーの誕生 東京 RC (1920 年) / 世界大恐慌 (1929 年) / 四つのテスト / 第 2 次世界大戦 / 国連憲章の制定 / 戦後のロータリーの流れ / 危機の時代	
<b>IV. ロータリーの目的</b>	<b>8</b>
ロータリーの綱領 : ロータリーの目的は「奉仕の理想」を奨励・育成すること	
<b>V. ロータリーの理念</b>	<b>9</b>
「奉仕の理想」とは何か / シェルドンの「ロータリーの哲学」 / Service (奉仕) と Profit (利益) の三角形 / Service における「正しい質」「正しい量」「正しい行動様式」とは / ロータリーに おける Service の現代的意義 / ロータリー・モットー (標語) / 国際ロータリーの使命とビジョン	
<b>VI. ロータリーの活動</b>	<b>12</b>
ロータリーの組織 / ロータリーの具体的活動 / 例会 / ロータリーにおける「親睦」とは / 例会出席は義務か / クラブ外活動 / 社会奉仕活動実践の原則 / 人道的奉仕活動の 場の拡大 / 奉仕活動の世界的課題 / 国際ロータリーのプログラム / ロータリー財団 / 米山記念奨学会 / ロータリー・クラブの自立性 / ロータリーにおけるリーダーシップ	
<b>VII. 国際ロータリー第 2840 地区の現状と課題</b>	<b>17</b>
会員数の大幅減少 / ロータリーの危機の本質は / 地区リーダーシップ・プラン (DLP) に よる地区管理 / 2840 地区 組織概略 / クラブ・リーダーシップ・プラン (CLP) の目的は クラブ活性化 / クラブの組織と地区組織 / 地区によるクラブ活性化支援策 : 地区ホーム ページ、卓話・研修出前サービス、クラブ研修支援	
<b>VIII. ロータリーの魅力と可能性</b>	<b>20</b>
<b>参考資料</b>	<b>23</b>
道徳律 / 決議 23-34 / 四大奉仕部門 / 大連宣言	

## I. ロータリーの定義

「ロータリー・クラブってどんな団体なんですか？」と一般の人に聞かれたとき、次の「定義」が参考になります。

ロータリーは、人道的な奉仕を行い、あらゆる職業において高度の道徳的水準を守ることがを奨励し、かつ世界における親善と平和の確立に寄与することを目指した、事業および専門職務に携わる指導者が世界的に結び合った団体である。  
(1976年 国際ロータリー 広報委員会)

ロータリーの歴史や理念を学び、奉仕を実践することによって、この「定義」の内容をより深く理解することができます。

## II. 奉仕と親睦 *Service and Fellowship*

「奉仕」と「親睦」はロータリーの両輪といわれます。ただ、原語（英語）の *Service* と *Fellowship* は、日本語の「奉仕」と「親睦」という言葉の意味と必ずしも同じではありません。ロータリー独自の概念 *Service* と *Fellowship* の真意を理解するために、ロータリーの歴史と理念を学びましょう。

## III. ロータリーの歴史

### ロータリーの創立（1905年）シカゴ RC

ロータリーの最初のクラブは、自由主義経済が過熱し過当競争や誇大広告、不正が横行する 20 世紀初頭の米国シカゴに誕生しました。商道德の欠如する風潮に耐えかねた青年弁護士ポール・ハリスは、友人 3 人と語らって、お互いに信頼のできる公正な取引をし、仕事上の付き合いがそのまま親友関係にまで発展するような仲間を増やそう、と考えました。

1905 年 2 月 23 日、最初の会合に集まったのは、発案者の弁護士ポール・ハリス、石炭商のシルベスター・シール、鉱山技師のガスターバス・ロア、仕立て屋のハイラム・ショーレの 4 人でした。

「ロータリー・クラブ (Rotary Club : RC)」という名称は、当初会合を会員の事務所で輪番（持ち回り）(in rotation) で開いていたことから「Rotary」（回転する、回転式の）という呼称になったとされています。

シカゴ RC は設立後 3 年で会員数は 200 名を超えたそうです。

## シカゴ RC の最初の綱領

創立の翌年 1906 年、シカゴ RC は最初の「綱領」（クラブの目的）として、以下の 2 項目を定めました。

- 第 1 本クラブ**会員の事業の利益**の増大。
- 第 2 通常**社交クラブ**に付随する**親睦**及びその他の特に必要と思惟する事項の推進。

会員間の相互扶助による会員の利益と社交クラブとしての親睦が謳われていますが、それだけでは、クラブの存在意義がないという声に応じて、2 年後、以下の項目が追加されました。

- 第 3 シカゴの最大の利益の推進、及び市民の誇りと忠誠とを市民の間に拡めること。

**地域社会に対する貢献、公共への奉仕**を謳ったこの第 3 項の追加によって、ロータリー・クラブの活動の方向性が定まりました。類似の社交クラブのほとんどが歴史の流れの中で消滅していきましたが、ロータリーは、この方向性を実践の中で深化・洗練させることで世界中に発展してゆくこととなります。

シカゴ RC が最初に行った社会奉仕活動は、公衆便所設置運動でした。無料の公衆便所に反対する醸造組合と百貨店組合の妨害もあり 1907 年の提唱から完成まで 3 年を要しましたが、単なる寄付行為ではなく市民運動にしていたことが、後のロータリーの社会奉仕活動のあり方を示唆しています。

## 親睦か 奉仕か

創立して 2～3 年でロータリーの最初の危機が訪れます。シカゴ RC 内で、会員同士の親睦や金銭的な相互扶助を優先させようとする「親睦・互惠派」と、精神的な仲間意識を大切に、対外的な奉仕活動を積極的に行っていこうとする「奉仕・拡大派」の対立が起こります。創始者のポール・ハリスやアーサー・シェルドンは、「奉仕・拡大派」でしたが、クラブ内では少数派でした。

ロータリーの例会の中で歌を歌う（ロータリー・ソング）習慣は、このシカゴ RC 内の路線対立でぎすぎすした雰囲気や和らげようと、シカゴ RC 5 人目の会員ハリー・ラグルスが呼びかけて当時の流行歌をみんなで歌ったのが始まりとされています。

## 全米ロータリー・クラブ連合会（1910 年）

シカゴ RC での「親睦か奉仕か」という対立を解消するため、クラブでは“親睦”を旨とし、当時シカゴから全米に広がり始めたロータリー・クラブの連合会で“理念提唱とクラブの拡大”を推進することになりました。1910 年、全米

16 クラブの連合会が設立されます。これが後に国際ロータリー（Rotary International：RI 1921～）に発展します。

国際ロータリーは、今では 200 以上の国と地域に広がり、クラブ数 33,446、会員総数 1,227,369 人（2009 年 4 月末現在）に達しています。

全米ロータリー・クラブ連合会の初代会長には、ポール・ハリス。事務総長はチェスリー・ペリーが就任しました（その後 32 年間在職）。

「もし私のことを国際ロータリーの設計者と呼んでもいいとしたら、チェスも同じように国際ロータリーの建設者（施工者）と呼んで間違いないでしょう」（ポール・ハリス）

### **道徳律（職業倫理訓）の策定**

事業および専門職務のリーダーたちの集まりであるロータリーは、自らの職業において高い道徳的水準を維持すること、業界の職業倫理を高揚することに力を入れました。

1915 年のサンフランシスコ国際大会で、「職業人のロータリー道徳律（職業倫理訓）」が採択されました。（→巻末 参考資料 1）

現在では、「歴史的文献」とされ、RI の公式資料には掲載されていませんが、その内容は、ロータリーの「奉仕理念」の真髄を表現しており、現代社会においても、ロータリアンが守るべき指針となるべきものと考えられます。

### **アーチ・クランフ基金創立（1917 年）**

1917 年アトランタ国際大会で、アーチ・クランフ会長（1916-17 年度）は「世界で善を成すための寄付金」を呼びかけ、「ロータリー基金」が創設されました。

1928 年のミネアポリス国際大会で、「ロータリー基金」は「ロータリー財団」と改称され、発展を続けました。

### **理念提唱か 奉仕の実践か**

ロータリーの第 2 の危機は、奉仕理念を提唱・奨励していくことを主にするか、実際に困っている人たちへの奉仕を積極的に行ってゆくか、という路線対立でした。（1915 年～1923 年頃）

理念提唱派は、自らの職業で利益を適正に配分し、業界の職業倫理を高揚し、自己研鑽に励み、奉仕活動は個人の立場で行うべきだ、と主張します。

一方、奉仕実践派は、社会的弱者に対する人道的奉仕を實踐すべきだ、そのためには、金銭的な援助や RC の団体としての活動も積極的に行っていこう、と主張します。

当時は、身体障害児への援助に熱心に取り組むクラブも多く、世間では RC は身体障害児援助専門の団体と思われていたこともあったそうです。身体障害

児対策に傾注しすぎて資金的に行き詰るクラブも出てきました。

この路線対立で、ロータリーは分裂の危機を迎えます。

### **決議 23-34 (1923 年)**

1923 年セントルイス国際大会で決議 23-34 (1923 年国際大会の第 34 号議案) が採択されました。(→巻末 参考資料 2)

これは、奉仕理念と奉仕実践の調和を図り、理念提唱か奉仕の実践かという路線対立を解消するものでした。

この 6 条からなる決議 23-34 は、現在では「社会奉仕に関する 1923 年の声明」として知られていますが、採択当時は、「社会奉仕」に限定されるものではなく、ロータリーの「奉仕」と活動に関する基本方針 (国際ロータリー並びにロータリー・クラブの未来の指針として綱領に基づく諸活動に関するロータリーの方針を明確に表わすもの) の表明でした。

第 1 条でロータリーとは何か、第 2、3 条でそれぞれ RC と RI の役割を述べ、第 4 条では「ロータリーは実践哲学」であることを謳い、第 5 条で「クラブ自治権」を確認し、第 6 条では、社会奉仕活動の指針を示しています。

特に第 1 条は、ロータリーの「綱領」に謳われている「奉仕の理想」すなわち奉仕の哲学を明確に定義した条文として極めて重要な価値があると考えられます。

**第 1 条** ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情とのあいだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕—「超我の奉仕」の哲学であり、これは、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という実践的な倫理原則に基づくものである。

### **四大奉仕部門の採用 (1927 年)**

1927 年、ベルギーのオステンド国際大会で「目標設定プラン」(The Aims and Objects Plan) が採択されました。初期のロータリーにおいては、その活動は例会内と例会外に分類するだけですが、活動が多岐にわたり複雑化するにつれ、奉仕プログラムを調和する必要がでてきました。クラブの管理運営を奉仕活動の実践に対応させ分類・整理したのが、「目標設定プラン」で提示された「四大奉仕部門」(The Four Avenues of Service) です。

クラブの活動を、「クラブ奉仕」「職業奉仕」「社会奉仕」「国際奉仕」の 4 部門に分け、それぞれ委員会を編成しました。これにより、クラブの組織と奉仕活動に整合性ができ、運営が円滑になりました。以後、この「四大奉仕部門」は、ロータリーの管理運営の基本的枠組みとして定着しました。

2007 年の規定審議会で、標準ロータリー・クラブ定款の第 5 条に、「四大奉

仕部門」の定義が掲載されることになりました。(→巻末 参考資料3)

### 日本のロータリーの誕生 東京 RC (1920年)

シカゴ RC が創立されて 15 年後、日本に初のロータリー・クラブが誕生しました。1920 年 (大正 9 年) 10 月、米山梅吉を初代会長として、東京ロータリー・クラブが創立します。世界で 855 番目のクラブでした。

1923 年 (大正 12 年) 9 月関東大震災が発生しました。この時、世界各地の 503 の RC より総額 8 万 9,800 ドルの義捐金・救援物資が届きました。これをもとに東京 RC は大規模な社会奉仕活動を実施します。日本のロータリアンが「ロータリーの力」を認識し、発展を目指すきっかけとなった出来事でした。

1928 年 (昭和 3 年) に発表された「大連宣言」は、初期の日本ロータリアンが、ロータリーの理念をよく咀嚼し日本語として表現した文書として、歴史的価値の高いものです。(→参考資料4 大連宣言 採択の経緯)

日本のロータリーは、第 2 次世界大戦時、RI から一時離脱 (1940 年) しましたが、戦後 1949 年 (昭和 24 年) 再び RI に復帰加盟し、米国に次ぐ第 2 のロータリー大国として発展します。

現在、日本全体でのクラブ数は 2,302、会員数は 91,592 人 (2009 年 6 月末現在) となっています。

### 世界大恐慌 (1929 年)

1929 年 10 月 24 日にニューヨーク証券取引所で株価が大暴落したことを端緒に世界的な規模で金融恐慌と大規模な経済後退が起きました。米国では、共和党から民主党への政権交代があり (1933 年フーバーからルーズベルトへ)、政治的にも混乱しました。ロータリーの第 3 の危機の時代です。

ロータリーは、この間も失業者や青少年への援助を中心に社会奉仕活動を続け、一方、職業奉仕の実践にも力を入れていました。一時的に会員数の減少はありましたが、ロータリアン企業も業績を早期に回復し、発展途上国の加盟クラブが増え、ロータリーは再び発展の時代を迎えます。

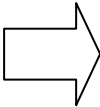
### 四つのテスト

世界大恐慌は、ロータリーの職業奉仕理念が大不況にも耐えうることを実証する機会となりました。

「四つのテスト」(*The Four-Way Test*) は、シカゴ RC の会員であったハーバート・テラー (後に 1954-55 年度 RI 会長) が、1932 年に倒産の危機に瀕していたクラブ・アルミニウム社の経営を任せられ、会社再建のために考案した社員の行動基準でした。テラーは、この 24 語 (英文) からなる行動基準を、従業員、顧客、取引先すべてに厳格に適用し、その結果会社の信用が増し、業績も回復しました。

RI 理事会は、この「四つのテスト」を 1943 年正式に採択しました。1954 年 RI 会長に就任したとき、テーラーは「四つのテスト」の版權を RI に寄付しました。以後、ロータリーでは、ロータリアンの行動規範、職業奉仕実践の基準として、「四つのテスト」を奨励しています。

「四つのテスト」の公式日本語訳（左）は簡潔でわかりやすいのですが、一般的な人生訓のようにすこし抽象的です。意識せずに職業奉仕の基準として改訳した例を右に示しておきます。

四つのテスト		四つのテスト
言行はこれに照らしてから		事業の立案・企画・実行はこれに照らしてから
1. 真実かどうか		1. 嘘・偽りはないか
2. みんなに公平か		2. 関係者すべてに公明正大か
3. 好意と友情を深めるか		3. 信用を高め、より良い関係を築けるか
4. みんなのためになるかどうか		4. 関係者すべてに有益か

## 第 2 次世界大戦

第 2 次世界大戦（1938 年～1945 年）はロータリーにも大きな影響を与えました。枢軸国（日本・ドイツ・イタリア等）の RC が国際ロータリーを離脱します。ロータリー第 4 の危機の時代です。

日本のロータリー・クラブの多くは、解散後も、例会の開かれた曜日にちなんだ名称（例えば火曜クラブ）で会合を続けました。日本の RC が国際ロータリーに復帰したのは 1949 年（昭和 24 年）のことです。

## 国連憲章の制定

第 2 次世界大戦後、ロータリー運動は躍進します。

1945 年、国際連合の設立準備会が開かれました。世界各国代表団のうち、7 名の委員長と 20 名の代表がロータリアンでした。代議員を含めて 49 名のロータリアンが参画したことになります。国連憲章の原案作成にも、RI から 11 名の顧問団が参画しています。

現在 RI は、国際連合経済社会理事会に最高位の協議資格を有する“国連 NGO”として活動中です。

## 戦後のロータリーの流れ

1960 年代以降、ロータリーは、青少年に対する奉仕やロータリー財団を通じた国際的なボランティア活動を本格化します。

- 1962 年～ 世界社会奉仕（WCS）プログラム開始
- 1962 年～ インターアクト発足
- 1968 年～ ローターアクト発足



- 1971年～ ロータリー青少年指導者養成プログラム（RYRA）開始
- 1978年～ 3-Hプログラム開始
- 1985年～ ポリオ・プラスプログラム開始

## 危機の時代

現代はロータリーの危機の時代といわれています。1997年以降日本のロータリーは会員数を減らし続けています。10年前の1999年には日本全体の会員数は122,530人で1クラブ平均会員数は53.8人でしたが（1999年7月末）、今年2009年6月末は、91,591人で1クラブ平均会員数は39.8人となっています。

しかし、会員数が減ることが「危機」なのでしょうか。会員数の減少は「危機」の表れに過ぎません。現代の「ロータリーの危機」の本質は、ロータリーが本来持っていた魅力や力が失われつつあることではないでしょうか。

ロータリーの奉仕理念とは真逆の、ロータリアン企業の不祥事が続発する今こそ、ロータリーの魅力と力を再興するために、改めてロータリーの目的や奉仕理念の意義を再確認する必要があると考えます。

## IV. ロータリーの目的

### ロータリーの綱領

ロータリーの目的は「ロータリーの綱領」に示されています。（RI定款・標準RC定款 第4条 綱領）

\*原文（英語）は“The Object of Rotary”だから、「綱領」ではなく「目的」と訳すのが正しい。

#### 第4条 綱領

ロータリーの綱領は、有益な事業の基礎として**奉仕の理想**を鼓吹し、これを育成し、特に次の各項を鼓吹、育成することにある。

- 第1 奉仕の機会として知り合いを広めること。
- 第2 事業および専門職務の道徳的水準を高めること。あらゆる有用な業務は尊重されるべきであるという認識を深めること。そしてロータリアン各自が業務を通じて社会に奉仕するために、その業務を品位あらしめること。
- 第3 ロータリアンすべてが、その個人生活、事業生活および社会生活に常に**奉仕の理想**を適用すること。
- 第4 **奉仕の理想**に結ばれた、事業と専門職務に携わる人の世界的親交によって、国際間の理解と親善と平和を推進すること。

「綱領」の最初の 2 行が本文で、以下の 4 項は本文の具体的説明となっています。したがって、ロータリーの目的は、要約すれば「**奉仕の理想**」を**奨励・育成すること**、です。それでは、「奉仕の理想」とは何でしょうか。

## V. ロータリーの理念

### 「奉仕の理想」とは何か

「奉仕の理想」は、“The Ideal of Service”の訳語です。“Ideal”を「理想」、「Service」を「奉仕」と直訳することで、原語のニュアンスが伝わらないと指摘する識者もいて、「奉仕理念」とか「サービス哲学」という訳語もありますが、ここでは、「**ロータリーのサービス理念**」と仮に訳しておきます。

従来“The Ideal of Service”の意味を解説した文献は、『公式名簿』巻末にチェスレー・ペリーが記した「ロータリー小史」の 1 節だけだとされていました。

全世界のロータリー・クラブは一つの基本理念—「奉仕の理想」を持っている。それは**他人のことを思いやり、他人のために尽くすこと**である。

しかし、1931年にRIが発行した「目標設定プラン」(*The Aims and Objects Plan*)というパンフレットの中で、“The Ideal of Service”の意味を以下の4つの言葉で示しています。

一つめは、ロータリーの第1モットーである「**超我の奉仕**」。二つめは、同じく第2モットーである「**最も良く奉仕する者、最も多く報いられる**」。三つめは、「**他者への思いやり**」。これは上記のチェスレー・ペリーの言葉と同じです。四つめは、「**人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい**」という黄金律(マタイによる福音書7-12)。

“The Ideal of Service”の意味は、以上4つの言葉の意味を包含したものと考えてよいでしょう。

### アーサー・F・シェルドンの「ロータリーの哲学」

ロータリー独自の“Service”概念を確立したのが、「ロータリーの哲学者」といわれ、ロータリーの第2モットー「最も良く奉仕する者、最も多く報いられる」の作者である、アーサー・フレデリック・シェルドンです。

シェルドンは1908年にシカゴRCに入会し、ロータリー活動や理念の哲学的根拠を提示した人です。

シェルドンは、1921年「ロータリーの哲学」という論文の中で、ロータリーの「サービス」の意義を詳しく論じています。

シェルドンは「ロータリーの哲学は、サービスの哲学である」と主張します。

そして、二つのロータリー・モットー “**Service Above Self - He Profits Most Who Serves Best**” の中の、“Service” と “Self” と “Profits” の関係を明らかにすることでロータリーの哲学を明確にしようとしています。

### **Service（奉仕）と Profit（利益）の三角形**

シェルドンは、“Service” と “Profit” とは、原因と結果の関係にある、と言います。“Service” があるから “Profit” が生じる。“Service” が先で、“Profit” はその結果である、と言うのです。

原因としての “Service” は、「正しい質」・「正しい量」・「正しい行動様式」で構成されており、一方、結果としての “Profit” は、仲間からの尊敬や自尊心の満足といった精神的な充実感と、物質的・金銭的な利益の両面を意味している。

\* “Profit” が単に「金銭的な利益」を指しているのではないことがこの記述から明らかである。

### **Service における「正しい質」「正しい量」「正しい行動様式」とは**

それでは、シェルドンの言う「正しい質」・「正しい量」・「正しい行動様式」とは、具体的には何を指しているのでしょうか。それは、

- 高い品質、適正な価格
- 豊富な品揃え
- 経営者・従業員の適切な接客態度
- 公正な広告
- 豊富な商品知識、高度な専門知識
- 十分なアフター・サービス

といった、現代企業が顧客の信頼を得るのに必須の「サービス」と異なりません。

「ロータリーのサービス理念（奉仕の理想）」を奨励・育成することが、現代社会の問題解決の大きな力になるのではないのでしょうか。

### **ロータリーにおける Service の現代的意義**

「サービス」という言葉は、日本では「値引き」「おまけ」「無料」などの意味で使われることが多く、また、「商品」（モノ）に対して人的労力の提供を「サービス」と呼んでいます。

一方、ロータリーにおいては、「サービス」を、その最も広い意味で使っています。すなわち、

- 「社会に役立つ価値を提供すること」
- 「世のため人のために尽くすこと」

ロータリーは、事業および専門職務の代表者の集まりですから、その「サー

ビス」は先ず自らの職業で発揮されることになります。それを「職業奉仕」と呼びます。自らの職業のサービス・レベルを高め、社会に貢献できるよう努めることが、ロータリアンの最優先課題といってもよいでしょう。

\*朝日・読売・日経の各新聞が、米国のオバマ新大統領の就任演説の日英対訳を掲載していました。その演説の中に3か所、Serviceという言葉が出てきます。現代の米国でのServiceという語の使われ方がよくわかるのでご紹介します。

一つは狭義のサービス。「商品・サービス」(goods and services)と「商品」という言葉と対にして、使われています。日本語訳でも訳しようがないので、「サービス」とカタカナ表記しています。

二つ目は、演説冒頭で、ブッシュ大統領に敬意を表して“I thank President Bush for his service to our nation”「私はブッシュ大統領のわが国への奉仕に感謝する」。朝日新聞はここを奉仕と訳さず、「わが国に対する貢献」としています。英語のServiceには、「奉仕」という日本語では伝わらない、「貢献」や「献身」の意味が含まれていることがわかります。

三つ目は、演説の後半、我々は過去のアメリカをつくり守ってきた英雄と同じように“the spirit of service”「奉仕の精神」をもつべきだ、と訴えています。そしてその「奉仕の精神」とは、「自分自身よりも大きな何かの中に進んで意味を見出す意思」と言い換えています。ロータリーの広義のService「世のため人のために尽くす」と重なっていると考えられます。

### ロータリー・モットー（標語）

ロータリーには二つのモットー（標語）があります。第1モットーは、「超我の奉仕」“Service Above Self”。そして、第2モットーが、アーサー・シェルドンの言葉で知られる「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」“He Profits Most Who Serves Best”です。

この二つのモットーの日本語訳については、昔から議論がありました。特に、第1モットーの「超我の奉仕」は「超我」が造語でもあり、カッコよいが意味がよくわからない、といわれていました。日本のロータリーの創始者である米山梅吉は、これを「サービス第一、自己第二」とか「自己に先立つサービス」と訳しました。「超我の奉仕」より原義を伝えています。第2モットーも、「最善のサービスをすれば、結果として最大の利益が得られる」とでも訳したほうがわかりやすいでしょう。

前掲のシェルドンの論文(『ロータリーの哲学』)でもこの二つのモットーは、一体化して提示され解説されていたように、二つのモットーを一つの主張として捉えると、ロータリー・モットーの真意は次のようになると考えられます。

**まずサービスを自己の利益や都合より優先させよう。利益はサービスの結果である。相手のために最善のサービスをすれば、その報いとして最大の金銭的な利益と、大きな精神的満足が得られる。**

ここで主張されている思想こそ、「ロータリーのサービス理念（奉仕の理想）」の核心です。

ロータリーの目的は、次のように言い換えることができます。

**ロータリーの目的は、「サービス理念」を広め、その価値を高めてゆくこと。**

そして、ロータリアンとは、個人生活・職業生活・社会生活等、人生のすべての面で、「サービス理念」の研鑽と実践を行う人である。

## 国際ロータリーの使命とビジョン

国際ロータリーは、長期計画（2007－2010年）の中で、その使命とビジョンを明らかにしました。

### 使命

ロータリー・クラブの世界的連合体である国際ロータリーの使命は、他者に奉仕し、高い倫理的基準を促進し、事業と専門職務および地域社会のリーダーの間の親睦を通じて世界理解、親善、平和を推進することである。

### ビジョン

国際ロータリーのビジョンは、世界理解、親善、平和を推進するための「超我の奉仕」に対するその献身があまねく認知されることである。

## VI. ロータリーの活動

### ロータリーの組織

ロータリーの組織の基本単位は、一人一人のロータリアン（会員）であり、一つ一つのロータリー・クラブ（RC）です。各クラブの管理主体はクラブ理事会です。地域の近い RC が分区・グループを形成し、それが集まって（ほぼ県単位。複数県の地区もある）地区となります。（世界には 531 地区、日本には 34 の地区がある。私たちの地区は 2840 地区（群馬県 1 県）と言い、8つの分区・グループ、47 の RC により構成されている）

地区は、国際ロータリー（RI）の役員である地区ガバナーが地区内 RC を指導・監督します。ガバナーから任命されるガバナー補佐は、各分区・グループの RC の管理運営に関してガバナーを補佐します。

地区は、3年に1回開かれる「規定審議会」（RI の立法機関。ロータリーのすべての約束事を審議し決定する。）に1名の代表議員を派遣しています。

世界は、34のゾーンで構成され（日本は3ゾーン）、各ゾーンからは RI 理事が指名され、RI 理事会（RI の管理主体）を構成しています。

RI は、全世界の RC の連合体であり、RI の会員とは、各 RC を指します。（私

たちロータリアンは、各 RC の会員だが、RI の会員ではない)

### ロータリーの具体的活動

ロータリーの活動は、大きくクラブ内活動とクラブ外活動に分けることができます。クラブ内活動の中心は毎週 1 回開かれる例会です。様々な委員会活動や炉辺会合(家庭集会・情報集会)、会員研修会、懇親会等への参加もあります。クラブ内の活動は、「クラブ奉仕」部門の委員会が推進します。

クラブ外活動の中心は奉仕活動(「奉仕の理想」の実践、社会へのサービスの提供)です。奉仕活動は、会員個人がそれぞれの得意分野で実践するだけでなく、クラブも「職業奉仕」、「社会奉仕」、「国際奉仕」の各部門の委員会で、活動を推進します。

クラブ外活動として、地区の行事やセミナー、そして国際大会に参加することも、ロータリアンとしての成長に欠かせません。

### 例会

毎週 1 回開かれる例会では、ロータリーの理念に共鳴した、心から信頼できる仲間と、純粋な「親睦」を楽しむことができます。会員は平等で、仕事上の取引関係や先輩・後輩の関係はクラブ内に持ち込まないのがルールです。

ロータリーには、職業分類制度があり(同一職業は 5 人または 10%以内)、会員の職業の多様性が確保されています。利害関係のない幅広い異業種の会員と事業上の発想の交換ができるのも、例会の楽しみのひとつです。

日本のロータリーの創始者米山梅吉は、例会は「人生の道場」である、と表現しています。ロータリーのサービス理念の真髄を学んだり、仲間とともにロータリアンとしての自己研鑽を行ったりできる場として、例会は RC の特長を最も表現できる会合です。

### ロータリーにおける「親睦」とは

ロータリーの「親睦」は、単に、一緒に酒を飲んだりゴルフをしたりすることではありません。「親睦」の原語は“*Fellowship*”ですが、「**仲間同士の親交、連帯、友情**」といった意味です。

“*Fellowship Through Service*”『奉仕を通じての親睦』はローターアクトの標語ですが、奉仕の心の研鑽と奉仕の実践を通じて育まれるのが“*Fellowship*”です。例会や奉仕活動は“*Fellowship*”を育む場として重要です。

### 例会出席は義務か

ロータリーは、毎週 1 回定期的に例会を開きます。そして、会員は、出席規定により、例会に出席するべき、と定められています。(標準 RC 定款第 9 条)

しかし、この規定は義務規定ではありません。例会出席は、会員資格を有す

る者（会員）なら**当然行使すべき権利（特権）**である、と考えるべきでしょう。

あなたも、RC 会員としての特権を行使して、ロータリー・ライフを充実させましょう。

\*「会員は、入会金と会費を支払うことによって、綱領の中に示されたロータリーの原則を受諾し、本クラブの定款・細則に従い、その規定を遵守し、これに拘束されることを受諾するものとする。そしてこれらの条件の下においてのみ、会員は、本クラブの特典を受けることができる。」（標準 RC 定款 第 15 条：『2007 手続要覧』251 ページ）

## クラブ外活動

ロータリアンが、クラブ外で「ロータリーのサービス理念（奉仕の理想）」に基づき、個人的に奉仕活動を実践する場合は、職場、地域社会から、国際社会まで広がっています。

クラブは、会員の訓練のため、また実際例を示すために、団体としての奉仕活動に取り組みます。

毎年 1 回開催される国際協議会（世界中のガバナー・エレクトが集まって学ぶ研修会）の会場入り口には、「**入りて学び、出でて奉仕せよ**」〈*Enter to learn, go forth to Serve*〉というスローガンが掲げられています。

私たちが、例会で学び、クラブ外で「サービス」を実践するという、ロータリアンの行動規範に相応しい言葉です。

## 社会奉仕活動実践の原則

ロータリー指導者は、社会奉仕を行う際の原則を次のように述べています。

- ・ 私たちが地域社会のニーズを推測するのではなく、地域社会の人たちが必要だと感じるものを見つける。
- ・ 自らが地域社会に入り込んで、地域社会の関心を探る。

元 RI 会長 クリフ・ドクターマン

- ・ 地域社会の既存団体に寄付するのではなく、自分たちの力で、プロジェクトを完成すべきである。

元 RI 会長 グレン・キンロス

## 人道的奉仕活動の場の拡大

「社会奉仕」（“Community Service”）という言葉がロータリーで使われだした頃は、“Community” といえ、その RC が属する地域社会を意味していました。しかし、地域間・国際間の交流が活発になるにつれて、ボーダーレス社会となり“Community” もその境界が拡大し、また不分明になってきています。

ロータリーでも、1962 年、異なる国の RC と地区が協力して実施する「世界社会奉仕」（World Community Service）プログラムが開始され、人道的奉仕活動の場は拡大してきました。

現在、ロータリーの人道的奉仕活動は、「社会奉仕」（地域社会）と「国際奉

仕」の部門が担っており、「ロータリー財団」が、それらの活動に資金的援助を行っています。

### 奉仕活動の世界的課題

RI 理事会は、地域社会のニーズを特定するとともに、RC の新しい奉仕プロジェクトを奨励し、また、すでに地域社会で RC が行っている活動から焦点を逸らさないために、奉仕の機会に関する項目として、9つの世界的な課題のリストを作成しました。

危機下の児童／障害者／健康管理／国際理解と親善／識字・計算能力向上／人口問題／貧困と飢餓救済／環境保全／都市部の関心事項

(『2007年手続要覧』 92ページ)

### 国際ロータリーのプログラム

インターアクト／ローターアクト／ロータリー地域共同体 (RCC) ／  
ロータリー親睦活動グループおよびロータリアン行動グループ／  
ロータリー友情交換／ロータリー・ボランティア／ロータリー青少年交換／  
ロータリー青少年指導者育成プログラム (RYLA) ／  
世界社会奉仕 (WCS)

\*2840 地区では、**太字**のプログラムを地区委員会で推進しています。

### ロータリー財団 *The Rotary Foundation*

非営利法人「**国際ロータリーのロータリー財団**」(これがロータリー財団の正式名称)の使命は、ロータリアンが、健康状態を改善し、教育への支援を高め、貧困を救済することを通じて、世界理解、親善、平和を達成できるようにすることです。

#### <ロータリー財団のプログラム>

##### 資金による支援

年次プログラム基金／恒久基金／ポリオ・プラス基金  
「毎年あなたも 100 ドルを」

##### 教育的プログラム

国際親善奨学金／ロータリー世界平和フェローシップ／研究グループ交換

##### 人道的補助金プログラム

マッチング・グラント／地区補助金／保険、飢餓追放および人間性尊重  
(3-H) 補助金

##### ポリオ・プラス

##### ロータリー財団未来の夢計画



## **(財) ロータリー米山記念奨学会**

ロータリー米山記念奨学事業とは、全国のロータリアンからの寄付金を財源として、日本で学ぶ私費外国人留学生に奨学金を支給し、支援する国際奨学事業です。日本と世界とを結ぶ「懸け橋」となって国際社会で活躍し、ロータリー運動の良き理解者となる人材を育成することが事業の使命です。

“日本のロータリーの父”米山梅吉の遺徳を記念して始まり、50年以上の歴史を持っています。世界に類を見ない、日本独自の多地区合同奉仕活動です。2840地区では、「米山奨学委員会」を常設して、その活動を支援しています。

## **ロータリー・クラブの自立性**

RCは社会奉仕活動を自主的に選ぶことについて絶対的な権利を持っています。RIや地区はRCの本部や上部団体ではありません。それぞれのクラブは自立しており、RIは、クラブの社会奉仕活動を命じたり禁じたりすることはできません。

しかし、権利を主張すれば、一方でRI会員としての義務（奉仕活動の実践）を果たす必要があります。それぞれのクラブの特徴を生かした独自の奉仕活動の開発は、RCの義務といってよいでしょう。

クラブやロータリアンが遵守すべきロータリーの組織規定には、「国際ロータリー定款」、「国際ロータリー細則」と、全世界のすべてのRCが採用しなければならない「標準ロータリー・クラブ定款」があります。

一方、クラブを円滑に運営するための、各クラブ個別の具体的規約として、「クラブ細則」があります。RIは「推奨RC細則」を提示していますが、クラブは「国際ロータリー定款」「国際ロータリー細則」「標準ロータリー・クラブ定款」と矛盾しない範囲でクラブの事情に応じた細則を自由に制定することができます。RCの組織、管理運営は、RIのお仕着せではなく、自クラブの目標や課題に適ったものにしてゆきましょう。

### **8.010. 活動に関するクラブの自主性**

クラブは、地元地域のニーズに応じて独自のプログラムを開発すべきである。クラブのために特定の奉仕プロジェクトやプログラムを提唱したり、指示したりすることは、RIのプログラムの範囲内ではない（『ロータリー章典』8.010.）。

## **ロータリーにおけるリーダーシップ**

ロータリーの組織運営は、会員の平等・対等な関係が前提になります。RCは、企業のように権限を持ったトップが指示・命令して動かす組織ではありません。

クラブの組織力を高めるためには、会員全員の合意形成・対話・協力が重要です。毎年交代するクラブ指導者（会長・理事会等）は、会員のモチベーションを高めることと、指導力の継続性（前年度・次年度の指導者との連携）に意

を用いることが大切です。

また、リーダーは、固定した役割ではなく、リーダーシップを発揮する人は場面によって変わります。会員それぞれがクラブ内でその個性と能力を存分に発揮できるよう、クラブ運営に工夫が必要です。

## **Ⅶ. 国際ロータリー第 2840 地区の現状と課題**

### **会員数の大幅減少**

2840 地区は、2000 年に地区分割により新潟（2560 地区）と分かれて群馬県 1 県の地区となりました。2840 地区の会員数は、日本全体の会員減少（→7 ページ 危機の時代）と歩調を合わせるように減り続けています。

分割当初、地区全体の会員数は 2,540 人（2000 年 7 月。ピークは 2000 年 12 月の 2,570 人）でした。以後毎年 100 人規模で減少し、2005-06 年度で下げ止まり、2006-07 年度で一時会員増に転じましたが、その後、再び減少し、今年 2009 年 7 月には 1,951 人となりました。2000 年からの 9 年間で 24%（およそ 4 分の 1）会員が減少したことになります。

1 クラブ平均会員数も、2000 年の 56.4 人から 2009 年の 41.5 人と、1 クラブ平均 15 人も会員が減少したことになります。

### **ロータリーの危機の本質は**

「ロータリーの歴史 危機の時代」（7~8 ページ）でも触れたように、会員数の減少は「危機」の表れに過ぎません。現代の「ロータリーの危機」の本質は、ロータリーが本来持っていた魅力や力が失われつつあることです。ロータリーの社会的存在価値が問われているのです。

そして、これは決して他人事ではなく、私たちロータリアン自身と私たちのクラブ自体の問題なのです。

会員数が減少したから資金的に地区やクラブの運営が大変だ、だから「会員増強」を、というような表層的な対応では「問題解決」できません。

「私たちのクラブの存在価値は何か」「私たちのクラブはどういうサービスで社会に貢献しようとしているのか」「私たちのクラブは会員にとっても、地域社会にとっても本当に魅力的か」「私のロータリアンとしての目標は何か」。

これらの問いにひとつの正解が用意されているわけではありません。これらの問いに対する答えを、クラブの仲間と誠実に追求していく他に「問題解決」の道はないのではないのでしょうか。

## DLPによる地区管理

2840 地区では、地区リーダーシップ・プラン (*District Leadership Plan : DLP*) とクラブ・リーダーシップ・プラン (*Club Leadership Plan : CLP*) によって、ロータリーの危機を本質的に問題解決すること、一言で言えば「ロータリーの再生」を目指しています。

DLPの目的は「クラブへの支援をより迅速かつ適切にし、十分に研修を受けた地区指導者の候補者をより多く育成し、財団や地区活動への参加を活性化し、革新的な指導者としてのガバナーの役割をさらに取り組みがいのあるものにするによって、**地区レベルとクラブレベルでロータリーの充実化を図ること**」(『2007年手続要覧』37ページ)です。

DLPでは、「ガバナー補佐」、「地区研修リーダー」、「地区委員会」に明確な責務が示され、ガバナーの活動を支えます。また、指導力の継続性、年度を超えた連携を重視しています。

ガバナー補佐は、各分区・グループの担当クラブの運営についてガバナーの活動を補佐し援助します。(DLP導入以前、「分区代理」という役職がありましたが、公式の役職ではありませんでした。ガバナー補佐は、ガバナーが任命する公式の役職です)

## 2840 地区 組織概略 (2009-10年度)

2840 地区の組織は、DLPを推進し、クラブの活性化を支援することができるように体制を整えています。

分区・グループ単位で8名のガバナー補佐がクラブを担当しています。ガバナー補佐は、「会員組織強化委員会」と「規定審議会立法案検討委員会」の委員を兼務しています。

常設委員会として、「会員組織強化委員会」、「広報(オンツ・モトリオル)委員会」、「管理運営委員会」、「IT委員会」、奉仕プロジェクトには、「職業奉仕委員会」、「社会奉仕委員会」、国際奉仕部門の「青少年交換委員会」、「世界社会奉仕・友情交換委員会」、新世代奉仕部門の「インターアクト委員会」、「ローターアクト委員会」、「ライラ委員会」、「ロータリー財団委員会」とその小委員会の「補助金・奨学金・年次寄付・恒久基金委員会」、「研究グループ交換・学友会・ポリオプラス委員会」、そして「米山奨学委員会」があります。

特別委員会(兼任可)として、「地区研修委員会」、「規定審議会立法案検討委員会」、「危機管理委員会」があります。

## CLPの目的はクラブ活性化

クラブ・リーダーシップ・プラン (*Club Leadership Plan : CLP*) は、2004年11月に、DLPの延長計画として、RI理事会で決定されました。2840地区で

は、2005-06年度より CLP の検討・導入を推進しています。

CLP の目的は、クラブ活力の再生、クラブの活性化です。

すべては、魅力的なロータリー・クラブづくりから始まります。魅力ある RC とは、クラブ会員だけでなく、会員候補者や地域社会にとっても、魅力的で存在価値を認められるクラブである、といってもよいでしょう。

CLP の検討・導入は、クラブのあり方を見直し、活性化する絶好のチャンスです。個性的で活力ある RC に再生する方法を CLP は提示しています。

CLP の具体的な実行策は以下の9つのステップで示されています。

1. 効果的なクラブの要素に取り組む**長期計画を立案**する。
2. 「効果的な RC となるための活動計画の指標」を活用し、クラブの長期計画に沿った**年度目標を設定**する。
3. 計画過程に参加する会員を含めて**クラブ協議会を実施**し、ロータリーの活動に関する情報を伝える。
4. クラブ役員、クラブ会員、地区指導者の間の明確なコミュニケーション（**意思の疎通**）を保つ。
5. 引継ぎ計画を含め、クラブの指導力と奉仕プロジェクトに**継続性**をもたせる。
6. **クラブ委員会構成**とクラブ指導者の役割と責務を反映させるべく、**クラブ細則を改正**する。
7. クラブ会員の**親睦をさらに深める**ような機会を提供する。
8. **会員全員**がクラブのプロジェクトや業務に**活発に関与**するよう計らう。
9. **包括的な研修**を企画する。
  - ・クラブ指導者が地区研修会合に出席する。
  - ・新会員のための一貫したオリエンテーションを定期的実施する。
  - ・現会員のための継続的教育の機会を提供する。
  - ・リーダーとしてのスキル開発プログラムを全会員に提供する。

## クラブの組織と地区組織

CLP の推奨するクラブの委員会構成は、「クラブ管理運営」「クラブ広報」「会員増強・退会防止」「奉仕プロジェクト」「ロータリー財団」の5つの常設委員会に簡素化されています。

もちろん、この CLP の委員会構成は強制ではありません。それぞれのクラブが、従来の「四大奉仕部門」に基づく委員会活動の継続性やクラブの会員数を考慮しながら、自クラブに最適な委員会構成を検討し、再編すればよいのです。

地区委員会は、CLP の枠組みと対応する整合性の取れた構成となっています。

「クラブ管理運営委員会」には、ガバナー補佐と「地区管理運営委員会」「IT

委員会」が、「クラブ広報委員会」には、「広報委員会」が、「会員増強・退会防止委員会」には、「会員組織強化委員会」が、「奉仕プロジェクト委員会」には、奉仕プロジェクト部門の各委員会が、「ロータリー財団委員会」には、地区の「ロータリー財団委員会」がそれぞれ対応し、「米山奨学委員会」も常設しています。「四大奉仕部門」の枠組みについても、地区協議会や各種セミナーでフォローできるようにしています。

また、クラブ研修体制を強化するため、各クラブに「クラブ研修リーダー」の設置をお願いしています。クラブ研修リーダーは、地区研修委員会やガバナー補佐と連携し、クラブの新会員や現会員に対してロータリー情報を提供し、ロータリーの歴史・理念や実践についての研修を行います。

### 地区によるクラブ活性化支援策

2840 地区は、地区内 RC の活性化を支援する施策やツールを提供しています。

地区ホームページには、これまでのすべての年度のガバナー事務所と今年度の牛久保ガバナー事務所のページ、地区内ロータリー・クラブ一覧、書庫、リンク先の情報が収められています。

2840 地区ホームページ表紙 <http://www.rid2840.jp/>

牛久保ガバナー事務所のページには、ガバナー。メッセージ、ガバナー月信、公式訪問、地区概要、地区大会情報・報告、委員会活動、セミナー報告等のコラムがあり、「クラブ支援ツール」には、クラブの活性化や組織強化のための各種支援ツールや「卓話・研修出前サービス」の案内が収められています。

牛久保ガバナー事務所のページ <http://www.rid2840.jp/ushikubo/>

クラブ支援ツール <http://www.rid2840.jp/ushikubo/help/>

「卓話・研修出前サービス」とは、クラブの要望に応じて、例会卓話やクラブ研修に講師を派遣する、地区のクラブに対するサービスです。

## Ⅷ. ロータリーの魅力と可能性

どこにロータリーの魅力を感じるかは、人それぞれで、新会員とベテラン会員とでは、ロータリーに対する意識や関わり方も違うでしょう。あなたも、これから例会に積極的に出席し、クラブの仲間とともに奉仕活動を行う中で、ロータリーの様々な魅力を発見・実感していただきたいと思います。

ここでは、ロータリーの特長（独自性）から得られる魅力をいくつかご紹介します。

まず、ロータリーのサービス理念（奉仕の理想）は、現代社会にも有効な普遍的な力を持った理念で、会員企業がこのサービス理念を事業に正しく適用す

れば、顧客に支持・信頼される企業に成長することができます。最近流行の「コンプライアンス」や「CSR（企業の社会的責任）」という言葉を持ち出さなくても、ロータリーのサービス理念を実践することが、企業の発展につながることを信じましょう。

例会での奉仕の心の研鑽と奉仕の実践を通じて育まれる“*Fellowship*”（仲間・同志としての連帯、友情：「親睦」）は、あなたの人生で何ものにも代えがたい財産となります。

職業分類制度によって多様な職業人が集う RC は、元々異業種交流会の性格を持っています。あなたは、様々な分野の異業種の知恵に気軽に接することができます。

米山梅吉翁が例会は「人生の道場」である、と言ったように、RC は、私たち多忙な職業人が「学習する場」として貴重です。ロータリアンとしての学習に終わりはありません。年齢を重ねても、常に「成長」している実感を味わうことができます。

ロータリーの人的ネットワークは、国や職業・宗教・人種・性別を問いません。他クラブへのメイク・アップや友好クラブとの交流、WCS、地区行事、国際大会等への参加等を通じて、地区内外、国内外のロータリー・ネットワークを広げましょう

ロータリーは現代社会に対してどのような力を持っているのでしょうか。世のため人のために役立つ価値をロータリーは持っているのでしょうか。

ロータリーの可能性、すなわち「ロータリーは何ができるのか」という問いは、「私たちロータリアンは何をなすべきか」という問いと置き換えることができます。

まず、私たちは、ロータリーのサービス理念を適用して、自らの職業のサービス・レベルを高め続けなければなりません。そして、自らが属する地域社会の発展を後援しましょう。

魅力あるクラブをつくり、ロータリーの理念に共鳴する仲間を増やしましょう。ロータリーの世界的ネットワークを通じて、国際理解と世界平和への寄与もできるでしょう。

ロータリアンであるとは、一つの生き方を選択したということだと思います。ロータリーのサービス理念（「奉仕の理想」）は、どこか遠くにあって仰ぎ見るものではなく、自分の個人生活・職業生活・社会生活の中に実現すべきものでしょう。

ロータリーのサービス理念の実践が、社会の中で自分を活かす道であり、社会をよい方向に導く強い力をもっていることを信じて、ロータリーの魅力と可

能性をこれからも追い求めていきましょう。私たちは、ロータリーが持っている力を、もっと信じてよいのではないのでしょうか。

2009－10年度RI会長のジョン・ケニーさんの年次テーマは「**ロータリーの未来はあなたの手の中に**」です。私たちはこの言葉を肝に銘じなければならないと思います。

「ロータリーでは、私たちがいかにあるのか、いかにありたいと願うかということのすべてが、それぞれのクラブのロータリアンたちの手の中にあります。もし、私たちのクラブが居心地よく例会がうまく運営されていれば、もし、奉仕活動が入念に計画され役に立ってあれば、もし、会員たちの質が高く誠実で、それぞれの職業や地域社会で尊敬を集めていれば、ロータリーは存続するでしょう。これが、私が「ロータリーの未来はあなたの手の中に (*The Future of Rotary Is in Your Hands*)」と言っている理由です。」  
(ジョン・ケニーRI会長)

(ロータリーの基本 本文おわり)

## 参考資料 1 道德律

### 道德律について

道德律はアイオワ州シュー・シティ・ロータリークラブが2年の歳月を掛けて起草し、1915年サンフランシスコ国際大会で採択された。

1911年ロータリー・モットーが採択され、定款改正が行われたにも拘わらずロータリアン同志の互惠主義が改善されないことに対して、1913年のドゥルース大会で、ロータリアン各自が如何にして職業倫理を高めるかの指針を作成し、次年度のヒューストン大会に提案することが決議され、シュー・シティ・ロータリークラブに委任された。同クラブは全国のロータリアンに提案を求めたところ数百に上る提案が集まり、翌年には纏めることが出来ず、苦心の未成文化して1915年サンフランシスコ大会に提出、採択され、公式な道德律として「ロータリー通解」に掲載、全会員に配布された。

その後、その内容が厳しすぎる（第6条）と言うことと、表現が宗教的（第11条）であることに対する批判が続出し、検討の末、理事会は1927年にこれを改訂、綱領を重視すべきであると1931年には配布中止、1951年には手続要覧の掲載中止、1980年にそれまであったR I細則第16条の「道德律」の言葉が削除され、「道德律」は歴史的なものとなって今日に至っています。

### 道 徳 律 11ヶ条

- 第1. わが職業は価値あるものであり世に奉仕する絶好の機会が与えられていると考えるべきこと。
- 第2. わが身を修め、わが能率を向上し、わが奉仕を拡大すべきこと。そうすることによって最もよく奉仕するもの最も多く報いられるというロータリーの基本原則に対して忠実なることを立証すべきこと。
- 第3. われは実業人であり成功の野心を抱いていることを認める。同時に道德を重んずる人間であり、最高の正義と道義に基づかざる成功はこれを欲するものではないと自覚すべきこと。
- 第4. わが商品、わがサービス、わが創意工夫を、利益を目的として他と交換するのは合法にして道德に基づくとの信念をもつべきこと。ただしすべての当事者がこの交換によって利益を受けることを前提とする。



- 第5. わが職業の標準を向上させるため最善の努力をいたし、その結果わが業務の進め方は賢明にして利益をもたらしこの実例にならえば幸福への道が開かれることを同業の者に悟らしむるよう実践すべきこと。
- 第6. わが競争者と同等ないしそれ以上の完全なサービスをなし得るような方法をもって業務を運営すべきこと。もし疑わしい際には厳格な意味の責任義務を越えて一層のサービスを行なうこと。
- 第7. 専門家あるいは実業人の最大の資産のひとつはその友人であることを理解すべきこと。そして友情を通じて得られたものこそ妥当なものであることを理解すべきである。
- 第8. ほんとの友人は互いに強要するものではなく、利益のためにみだりに友人の信頼を用いることはロータリーの精神に一致せず道徳律を汚すものである。
- 第9. 他の方が行なわないような不正の方法によって機会を利用して得た成功は合法的でなく道徳にも反する。また道徳的に疑わしいため他の人の採らない機会に乗じて得る成功などは欲しないこと。
- 第10. われは一般の人以上にロータリアンたる友人を拘束することはしない。ロータリーの原則は競争ではなく協力であるからである。党派心はロータリーのごとき制度においてはあってはならない。人格はロータリー内に限られるものではなく広く人類一般に深く根ざすものであることを確認し、すべての人や社会制度をこの高遠な理想に向かわしめるためにロータリーは存在するものである。
- 第11. 最後に「すべて人にせられんと思うことは人にもその通りせよ」という黄金律の普遍性を信じ、地上の天然資源に対してすべての人に均等な機会を与えられてこそ人類社会は最良の状態になるということを主張するものである。

(監修：R J W委員会 2003/7/21)

## 参考資料 2 決議 23-34

### 社会奉仕に関する 1923 年の声明 (1923 Statement on Community Service)

次の声明は 1923 年国際大会で採択され、以後の国際大会で改正されたものである。

ロータリーにおいて社会奉仕とは、ロータリアンのすべてがその個人生活、

事業生活、および社会生活に奉仕の理想を適用することを奨励、育成することである。

この奉仕の理想の適用を実行することについては、多くのクラブが会員による奉仕にその機会を与えるものとして、さまざまな社会奉仕活動を進めてきている。以下に掲げる諸原則は、ロータリアンおよびロータリー・クラブの指針として、また、社会奉仕活動に対するロータリーの方針を明確に表すものとして適切であり、また管理に役立つものであることを認め、これを採用するものである。

1) ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情とのあいだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕—「超我の奉仕」の哲学であり、これは、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という実践的な倫理原則に基づくものである。

2) 本来ロータリー・クラブは、事業および専門職務に携わる人の代表として、ロータリーの奉仕の哲学を受け入れ、次の四つのことを実行することを目指している人々の集まりである。

まず第1に、奉仕の理論が職業および人生における成功と幸福の真の基礎であることを団体で学ぶこと。第2に、自分たちのあいだにおいても、また地域社会に対しても、その実際例を団体で示すこと。第3に、各人が個人としてこの理論をそれぞれの職業および日常生活において実践に移すこと。そして第4に、個人として、また団体としても大いにこの教えを説き、その実例を示すことによって、ロータリアンだけでなく、ロータリアン以外のすべての人々が、理論的にも実践的にも、これを受け入れるように励ますことである。

3) RI は次の目的のために存在する団体である。

a) ロータリーの奉仕の理想の擁護、育成および全世界への普及。

b) ロータリー・クラブの設立、激励、援助および運営の管理。

c) 一種の情報交換所として、各クラブの問題を研究し、また、強制でなく有益な助言を与えることによって各クラブの運営方法の標準化を図り、社会奉仕活動についても、既に広く多くのクラブによってその価値が実証されており、RI 定款に掲げられているロータリーの綱領の趣旨にかなない、これを乱すような恐れのない社会奉仕活動によってのみ、その標準化を図ること。

4) 奉仕するものは行動しなければならない。従って、ロータリーとは単なる心構えのことをいうのではなく、また、ロータリーの哲学も単に主観的なものであってはならず、それを客観的な行動に表さなければならない。そ

して、ロータリアン個人もロータリー・クラブも、奉仕の理論を実践に移さなければならない。そこで、ロータリー・クラブの団体的行動は次のような条件の下に行うように勧められている。いずれのロータリー・クラブも、毎年度、何か一つの主だった社会奉仕活動を、それもなるべく毎年度異なっていて、できればその会計年度内に完了できるようなものを、後援することが望ましい。この奉仕活動は、地域社会が本当に必要としているものに基づいたものであり、かつ、クラブ会員の一致した協力を必要とするものでなければならない。これは、クラブ会員の地域社会における個々の奉仕を奨励するためにクラブが継続的に実施しているプログラムとは別に行われるべきものとする。

- 5) 各ロータリー・クラブは、クラブとして関心があり、またその地域社会に適した社会奉仕活動を自主的に選ぶことについて絶対的な権利をもっている。しかし、いかなるクラブも、ロータリーの綱領を無視したり、ロータリー・クラブ結成の本来の目的を危うくするような社会奉仕活動を行ってはならない。そして **RI** は、一般的な奉仕活動を研究し、標準化し、推進し、これに関する有益な示唆を与えることはあっても、どんなクラブのどんな社会奉仕活動にせよ、それを命じたり禁じたりすることは絶対にしてはならないものとする。
- 6) 個々のロータリー・クラブの社会奉仕活動の選択を律する規定は別に設けられていないが、これに関する指針として以下の準則が推奨されている。
  - a) ロータリーの会員の数には限りがあるので、ロータリー・クラブは、市民全体の積極的な支持なくしては成功しえないような広範囲の社会奉仕活動は、他に地域社会全体のために発言し、行動する適切な市民団体などの存在しない土地の場合に限り、これを行うこととすべきであり、商工会議所のある土地では、ロータリー・クラブはその仕事の邪魔をしたり、横取りをしたりすることのないようにしなければならない。しかし、ロータリアンとしては、奉仕を誓い、その理念の教えを受けた個人として、その土地の商工会議所の会員となって活動すべきであり、また、その土地の市民として、他の善良な市民と一緒に、広くすべての社会奉仕活動に関与し、その能力の許す限り、金銭や仕事の上でその分を果たすべきである。
  - b) 一般的に言って、ロータリー・クラブは、どんな立派な事業であっても、クラブがその遂行に対する責任の全部または一部を負う用意と意思のない限り、その後援をしてはならない。
  - c) ロータリー・クラブが奉仕活動を選ぶ場合に宣伝をその主たる目標としてはならないが、ロータリーの影響力を拡大する一つの方法として、ク

ラブが立派に遂行した有益な事業については正しい広報が行われるべきである。

- d) ロータリー・クラブは、仕事の重複を避けるようにする必要があり、総じて、他に機関があり、それによって既に立派に行われている事業に乗り出すようなことをしてはならない。
- e) ロータリー・クラブの奉仕活動は、なるべく現存の機関に協力する形で行うことが望ましいが、現存機関の設備や能力が目的の遂行に不十分である場合には、必要に応じ、新たに機関を設けることにしても差し支えない。ロータリー・クラブとしては、新たに重複した機関をつくるよりも、現存の機関を活用することのほうが望ましい。
- f) ロータリー・クラブはそのすべての活動において、宣伝者として優れた働きをし、多大の成功を収めている。ロータリー・クラブは地域社会に存在する問題を見つけ出すことはしても、それがその地域社会全体の責任にかかわるものである場合には、単独でそれに手を下すようなことはしないで、他の人々にその解決の必要を悟らせる努力をし、地域社会全体にその責任を自覚させて、この仕事がロータリーだけの責任にならないで、本来その責任のある地域社会全体の仕事になるようにしている。また、ロータリーは、事業を始めたり、指導したりするが、一方、当然それに関心をもっていると考えられるほかのすべての団体の協力を得るように努力すべきであり、そして、当然ロータリー・クラブに帰すべき功績であっても、それに対する自分のほうの力を最小限度に評価して、そのすべてを協力者の手柄にするようにしなければならない。
- g) クラブがひと固まりとなって行動するだけで足りるような事業よりも、広くすべてのロータリアンの個々の力を動員するものの方がロータリーの精神によりかなっていると言える。それは、ロータリー・クラブでの社会奉仕活動は、ロータリー・クラブの会員に奉仕の訓練を施すために考えられたいわば研究室の実験としてのみこれを見るべきであるからである (23-34、26-6、36-15、51-9、66-49)

(『2007年手続要覧』84～86ページ)

### 参考資料3 四大奉仕部門

#### 第5条 四大奉仕部門

ロータリーの四大奉仕部門は、本ロータリー・クラブの活動の哲学的および実地的な規準である。

1. 奉仕の第一部門であるクラブ奉仕は、本クラブの機能を充実させるために、クラブ

内で会員が取るべき行動に関わるものである。

2. 奉仕の第二部門である職業奉仕は、事業および専門職務の道徳的水準を高め、品位ある業務はすべて尊重されるべきであるという認識を深め、あらゆる職業に携わる中で奉仕の理想を生かしていくという目的を持つものである。会員の役割には、ロータリーの理念に従って自分自身を律し、事業を行うことが含まれる。
3. 奉仕の第三部門である社会奉仕は、クラブの所在地域または行政区域内に居住する人々の生活の質を高めるために、時には他と協力しながら、会員が行うさまざまな取り組みから成るものである。
4. 奉仕の第四部門である国際奉仕は、書物などを読むことや通信を通じて、さらには、他国の人々を助けることを目的としたクラブのあらゆる活動やプロジェクトに協力することを通じて、他国の人々とその文化や慣習、功績、願い、問題に対する認識を培うことによって、国際理解、親善、平和を推進するために、会員が行う活動から成るものである。

(標準ロータリー・クラブ定款 第5条)

#### 参考資料4 大連宣言 採択の経緯

### 大連宣言採択の経緯：第70地区（日本）大会

1936年（昭和11年）2月23日ロータリー創立31周年を祝う各地のロータリークラブで例年のとおり記念例会や家族会が開かれたがその日から東京は大雪となった。

その雪の降り積った2月26日の明けがた青年将校らに率られて、近衛師団の一部がクーデターをくわだて首相官邸その他を襲撃し、内大臣斎藤実、蔵相高橋是清、陸軍教育總監渡辺錠太郎を殺し、侍従長鈴木貫太郎を傷つけ、永田町一帯にたてこもった。

政府は直ちに戒厳令をしき27日早朝天皇から鎮圧の命令が下った。そして「兵に告ぐ、今からでも遅くない原隊へ帰れ」という放送がなされ、ビラがまかれて29日1発の弾丸も撃たれず事態は收拾された。

この報を聞いてまさに発送されんとしていた大会案内状を押えて善後策を講じ、地区年次大会は中止または延期すべしという意見も出たが、ガバナー事務所芝染太郎の来神を得て相談の結果、規約どおり期日に開催を決行することになった。

ただこの情勢のもと東久邇宮殿下、賀陽宮殿下のご臨席を願うべきかどうかということで会長秋田信太郎らは上京して米山梅吉、森村市左衛門らと相談し、結局ご出席をお願いせずご案内も遠慮することになった。

この大会に国際ロータリーから会長代理として派遣されたマッカロー元会長 Crawford McCullough は、シナ南部を旅行中天候不良のためついに上海で船を逸し大会に出られぬこととなり、そのメッセージは米山梅吉が読むこととなり、勝山勝司による訳文が参会者に配布された。

前年の京都の大会で始められた前夜懇談会は今度はあらかじめ各クラブに議題提出を求め、オリエンタルホテルにおけるその会場も討論にふさわしく用意された。

提案には「紀元2600年を期して国際大会を日本で開かれたし」「国際ロータリーの中央集権制を緩和して地区分権制に改めること」、「アメリカのロータリー・クラブにおける東洋人差別待遇問題」などがあったが、神戸クラブの直木太一郎が提出した「大連ロータリー・クラブのロータリーの宣言は日本文として適切にロータリー精神をあらわしているからこれを第70地区の宣言にしたい。」がおりからのロータリーの日本化問題に関連して思わぬ波乱をまき起こしたのであった。

大連クラブのロータリーの宣言は次のとおりである。

- 第1 須らく事業の人たるに先立ちて道義の人たるべし。蓋し事業の経営に全力を傾倒するは因って世を益せんがためなり。ゆえに吾人は道義を無視していわゆる事業の成功を獲んとする者に与せず。
- 第2 成否を曰うに先立ち退いて義務を尽さむことを思い進んで奉仕を完うせんことを念う。自らを利するに先立ちて他を益せむことを願う。最も能く奉仕する者、最も多く満たさるべきことを吾人は疑わず。
- 第3 あるいは特殊の関係をもって機会を壟断しあるいは世人の潔しとせざるに乗じて巨利を博す、これ吾人の最も忌むところなり、吾人の精神に反してその信条を紊るは利のため義を失うよりはなはだしきは無し。
- 第4 義をもって集まり、信をもって結び、切磋し琢磨し相扶け相益す。これ吾人団結の本旨なり。しかれども党をもって厚くすることなく他をもって拒むことなく私をもって党する者にあらざるなり。
- 第5 徒爾なる角逐と鬭争とは世に行なわるべからず、協力をもって博愛平等の理想を実現せざるべからず、しかり吾が同志はこの大義を世界に敷かむがために活躍す、吾がロータリーの崇高なる使命ここに在り、その存在の意義またここに存す。

これに対し米山梅吉は国際ロータリーにおいて厳粛に決定せられているロータリーの綱領は一言一句の変更も許されぬものと言ったが、京都の田辺隆二会長はそれは英文できめられているもののことで、そのほかにその精神を日本文であらわすものがあってよい、また英文は誤解をいだかれやすくそれも逐次訳

でなければならぬこともないと反論し、神戸の黒瀬弘志もいずれにしてもロータリーはもっとよく咀嚼されねばならぬとその平素の持論を持ち出し、村田前ガバナーもまたこの大連クラブの宣言を見出して推奨したのはほかならぬ自分であって、これは立派なものだからこれを英訳してシカゴ本部へロータリーの綱領を改正するよう提案したらどうか、と言ったので議論がふつとうし、どうなることかと思われたが、大阪の里見純吉はこの提案は綱領の変更ではなくそれを補充説明するものとして採用したいというものと賛成し、神戸の藤井松四郎がすかさずセコンドしたのでようやくおさまった。

注：大連宣言は今日では正規の決議案としては存在しませんが、ロータリーの日本化運動を物語るものとして、戦前の日本ロータリー史として記録・保存されています。

(「ロータリー日本五十年史」より抜粋)

(監修：R J W委員会) 2003/7/23

#### 参考資料

『ロータリー章典』(“*Rotary Code of Policies*”)

『2007年 手続要覧』(“*2007 Manual of Procedure*”)

『ロータリーの友』

『奉仕の一世紀 — 国際ロータリー物語』(ディビッド・フォワード著 2003)

『ロータリー日本五十年史』(ロータリー50年史編集委員会 1971)

『ロータリー入門書』(前原勝樹・重田政信著)

「ロータリー文庫」の各種資料

田中毅氏(2680地区PDG)のホームページ『ロータリーの源流』の研修資料

鳴海淳郎氏(別府中央RC)のホームページ『ロータリー探求』

その他、過去100年のロータリー指導者たちの諸著作

国際ロータリー第 2840 地区 2009-10 年度

**ロータリーの基本 ～研修の手引き～**

2009 年 9 月 6 日

執筆 地区研修委員会